

3 インド系文字の現地化と祖先の記憶

澤田英夫

さわだ ひでお / AA 研

ブラーフミー文字の子孫である
インド系諸文字は、多様性を示しつつ、
共通点も多く残す。東南アジアの
現地語への適応を達成しながらも、
祖先であるブラーフミー文字の記憶は、
現在のインド系諸文字の中に、確かに
刻まれているのである。

現在のインド系諸文字は、驚くべき多様性を示している。それは、前節で述べたような現地語への適応の試み、文字体系の成立後に言語音が変化することで生じた音と文字の間のずれを解消するための修正、書写材料や文字使用の習慣の移り変わりに伴う字形の変化、自分たちのアイデンティティを主張するための特徴ある書体の創出など、さまざまな要因が組み合わさった結果である。しかし、もとはブラーフミー文字という共通の先祖から分かれ出たこれらの文字は、

当然ながら多くの共通点を持っている。インド系諸文字を各地の郷土料理に例えるなら、味のベース（共通性）に加えられたスパイス（独自性）のさじ加減が、それぞれの料理に絶妙な味わいを与えていると言えるだろう。本節では、各地域で自らの言語を文字であらわす際にどんな工夫をしたのか、そしてみごとに現地化を成し遂げながらもどのように祖先の記憶を失わずに保ち続けているかを見ていこう。

子音字の取捨

ブラーフミー文字の子音字は「5×5+その他」の体系をなす。「5×5」とは、発音の際に口腔内のどこかが一瞬でも閉じられる子音を表す25文字の体系である【図1】。「その他」にはy、r、l、v、sなどの子音を表す文字が含まれる。

インド亜大陸のインド系文字の多くでは、「5×5」が各々異なる音を表記する。しかし、東南アジア大陸部のインド系文字には、表記言語本来の（つまり借用語でない）語を表記するのに「5×5」の全てを用いるものは一つもない。図1と照らし合わせながら、図2、3、4をご覧ください。

		A	B	C	D	E
		無声		有声		鼻音
		無気	有気	無気	有気	
1	「カ」・鼻濁音「ンガ」	k	kh	g	gh	ṅ
2	「チャ」・「ニャ」	c	ch	j	jh	ñ
3	反り舌の「タ」・「ナ」	ṭ	ṭh	ḍ	ḍh	ṇ
4	「タ」・「ナ」	t	th	d	dh	n
5	「パ」・「マ」	p	ph	b	bh	m

図1 インド系文字の5×5

ក	ខ	គ	ឃ	ង
ច	ឆ	ជ	ឈ	ញ
ដ	ប	ឌ	ឍ	ណ
ត	ថ	ទ	ធ	ន
ប	ផ	ព	ភ	ម

図2 クメール文字の5×5

3段目(反り舌の「タ」「ナ」)の字のうち、A、C、E列はクメール語独自の子音を書き表すために転用され、B、D列は原則としてサンスクリット語からの借用語を書き表すために用いられる(網掛けを施した字)。後者は現地音化、つまりクメール語の音に同化したために、対応する4段目(「タ」「ナ」)の字と同様に読まれるようになった。(図では同じ音で読まれる字を、囲い線でひとまとめにしてある。)

ก	ข	ค	ฃ	ง
จ	ฉ	ช	ฌ	ญ
ฎ	ฏ	ฑ	ฒ	ณ
ด	ถ	ท	ธ	น
บ	ผ	พ	ภ	ม

図3 タイ文字の5×5

原則として、タイ語本来の語の表記には3段目およびD列(有声有気音)の字が現れない。これらの字は主にサンスクリット語からの借用語を書き表すために用いられる。借用語音が現地音化した結果、3段目の字は対応する4段目の字と同じように読まれ、D列の字は対応するC列と同様に有声無気音で読まれるようになった。

ກ	ຂ	ຄ	×	ງ
ຈ	×	ຊ	×	ຍ
×	×	×	×	×
ດ	ຖ	ທ	×	ນ
ບ	ຜ	ພ	×	ມ

図4 ラオ文字の5×5

ラオ語本来の語に原則として現れない3段目・D列の字を放棄した点が、タイ文字との大きな違いである。同音異綴が減って読み書き自体は楽になった反面、借用語の語源がわかりにくくなってしまったという副作用をもたらした。表音の合理性を追求することで文化的な情報の一部が失われたわけで、文字が文化と密接に結びついていることを改めて思い知らされる例と言える。

母音記号 -o に見るブラーフミーの記憶

ブラーフミー文字では、母音記号-o (以下、文字類の転写は斜字体で示す) は、図5に示すように図形的に母音記号-e と母音記号-ā の組み合わせによって表記される。

当然のことだが母音/-o/ (以下、/ /内は発音を示す) をこのように表記しなければならぬ理由はどこにもなく、この構成法は、ブラーフミー文字がたまたま採用した方法にすぎない。ところがこの構成法は、東南アジアでも、形を変えながらも脈々と受け継がれているのである。

母音記号-o は、インド系文字の伝播と分化の過程で様々な形に変容した。西暦7世紀頃の東南アジアの碑文を記すのに用いられたインド系諸文字には、主に、図6、7に示すような2つのパターンが見られる。

図6に示す図形パターンでは-aに対応する部分のみが下に垂れ下がる形をしている。北インドのデーヴァナーガリーやグジャラートなどの文字などがこの図形パターンを取るの仮に北インド型と呼ぶ。東南アジアでは主にチャム碑文に現れるが、現代の文字には見られない。

図7に示す図形パターンでは-eに対応する部分も下に垂れ下がる形をしている。南インドのタミル、マラヤーラム、東インドのベンガル、アッサム、オリヤー、それにシンハラ各文字がこのパターンを取るの仮に南・東インド型と呼ぶ。東南アジアの多くの碑文にこのパターンが見られ、現代のジャワ、バリ、クメール、モン、ビルマ、シャンなどの文字もこのパターンを取る。ここでは代表として現代クメール文字の例を出しておこう【図8】。

いずれのパターンでも、ブラーフミー文字がたまたま採用した字形の構成法がDNAのよ

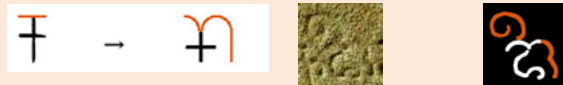
うに受け継がれているのである。

タイ文字では文字とそれが表す音との関係が少々ややこしくなっている。クメール文字をもとに作られたタイ文字は、南・東インド型であるクメール文字の母音記号-oを引き継いで現在に至る。しかし、それが表す音は、/-o/でなく/-aw/である【図9】。一方、現代タイ語の/-o/という発音に対応するタイ文字の母音記号は、どうやら古いクメール文字の母音記号-aulに由来するらしい。記号の右半分が縮み、子音字の左側に直立して現代のような字形になったと思われる【図10】。タイ人がクメール文字を受け入れた際、何らかの理由で文字と音の関係を変更したのか、あるいは文字を受け入れた後でタイ語の音が変化して文字と音の関係に変更が生じたのか、詳細は未だ謎である。

図5 ブラーフミー文字の-oの構成法

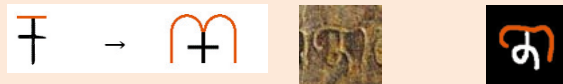


図6 母音記号の-oの図形パターン「北インド型」



西暦7世紀チャム文字の to (プラカーシャタルマの碑文 C87: ベトナム、ダナン、チャム彫刻博物館蔵)

図7 母音記号の-oの図形パターン「南・東インド型」



西暦7世紀クメール文字の to (碑文 K149: カンボジア、ソムポー=ブレイ=クック遺跡)

図8 現代クメール文字の-oとその構成法



現代クメール文字の to (時間を経て音が変わり、現在では /tao/ と発音) 現代クメール文字の te 現代クメール文字の tā

図9 現代タイ文字の母音記号-oとその構成法



現代タイ文字の po (発音は /baw/) 現代タイ文字の pe (発音は /be/) 現代タイ文字の pa (発音は /ba/)

図10 「現代タイ文字と西暦7世紀クメール文字の母音記号-au」



現代タイ文字の pau (発音は /bo/) 西暦7世紀クメール文字の pau (碑文 K149: カンボジア、ソムポー=ブレイ=クック遺跡)



ミャンマー最北の州カチン州のワインモー郡にて。寄付を行った人々の来歴を記した文書をめぐるタイ・レン族(カチン州に住むタイ系民族)の男性。

「ヤンゴンの神保町」、バンソーダン通り道端の本屋。ミャンマーにはまだ道端の露店が多く、写真のように書店の前の歩道に別の本屋が店開きしていることも珍しくない。手前の、こちらに背を向けた男性がおそらく店主であろう。

